

「ハイ。」

「貴様、ひどい男だ。おれはナ六十年も前から住んでいる士だ。貴様はどこから来たかわからぬ分際ぶんざいで同じく水をかけようとは虫がよすぎる。余ったらやるから待っている。」

「でもそれでは稲は枯れますダ。」

「だから今まで誰も作らなかつたのだ。きさまら勝手に入って来て大きな顔おんこして田を作るなんて生意気だ。さっさと失うせろ。」

「士さん、そうはいきません。わしら代官様のおせわで来たんですぜ。」

「何、生意気な、つべこべいうと斬るぞ。」

五左エ門は刀に手をかけた。三太郎は持っていた棒でその手をたたいた。士のひるむすきに三太郎は後の山に逃げた。

三太郎は大それたことをしてしまったと後悔した。家族の者もどうなることかと夜も眠れなかつた。

何日かたった。五左エ門は再び訪れた。士はおとなしく言った。

「三太郎、陣屋まで同道せい。」

「ハイ承知いたしました。」